

ささいな戦争体験

福岡市中央区 明石 佳代子

50年以上の時を経てしまうと記憶の端々がぼやけてしまう。私は小学3年の8月に終戦を迎えたので、その年か1年前の事だったと思う。

全校生徒、校庭に整列して朝礼の最中だったから10時前、空は曇りがちで季節は梅雨時だったような気がする。折しも風紀係の先生の訓示があっていた。当時、教練とか風紀係の先生と言えば泣く子も黙る存在。全生徒カチーンとなっていて聞いているはずなのに、上級生の方からざわめきが伝わってきた。「敵機だ」と言う声々に壇上で青筋を立てた先生も空を見上げて、次の瞬間「全員教室へ避難！」と呼ばれた。しかしその声よりも早く、ふだんは生徒の出入りを禁じている正面玄関へ一斉になだれ込んだ。

戦時中は子供でも敵味方の飛行機音を聞き分けていた。先生がなるべく学級で固まるように、責任者は点呼をとるよう告げて回られたが、日頃訓練しているので、玄関の混乱もすぐに収まり、学級単位で最寄りの教室の机の下に身を潜めた。私のクラスは女子ばかりだったが級長さんは男勝り、乱暴ではあったが見事な統率ぶりだった。脱いだズックを抱いて目と耳を抑え机の下にピッタリ伏せていると、低空で飛ぶ飛行機の音と『タタタッ』とか『パリパリッ』という機関銃の音が断続的にした。音の方向は、上空というほかは真上なのか離れたところなのか全く見当がつかない。第一、なぜ突如として現れた敵の一機が機銃攻撃をするのか訳がわからない。「学校が狙われている」「次は爆弾がくる」などと憶測の私語が漏れ、不安はいやがうえにも増幅する。級長さんは一人机の間を歩き回り檄を飛ばしながら責任者の特権を存分にした。私語や身動きをすると物差しでビシャリとやられるのである。

機関銃の音はものの5～6分だったろうか、しかし私たちには限りなく永い刻であった。次の瞬間弾がわが身を貫くのではという死の恐怖の中で皆が思うことは、母が父が家族が側にいないこと、再び父母の元へ帰れるなら日頃のわがまを改めますなど、悔恨の思いまでもが一樣に小さな頭の中を駆けめぐった。機関銃が止んでも執拗に旋回している飛行機の音はしていたが、学校全体は静寂だった。やっと敵機も去ったとおぼしき頃、さすがにこらえきれなくなって「おかあさん」と小さく呼ぶ涙声や、すすり泣きが漏れたが、級長さんにたしなめられた。

避難解除の指令はなかなか出なかったが、次第にあちこちで物音、人の声がし始めた。その時、遠くで耳慣れた声が出て私は一人耳を澄ませた。「3年3組の明石佳代子は、どこにおりましたでしょうか」。2度3度呼ばわる声の中庭の方でした。父である。ほんの今しがた死別を想像していた私には胸躍る嬉しさだった。そして、どこの父兄よりも早く子供を捜しに来てくれた父をさすがと思った。スパルタ式教育を自認する父は、子供達にとっても厳しく最も怖い存在であったが、この時は温かいものを感じた。とはいえ、女々しい事を許さない躰で育てられた私

には走り出ていくことができなかつた。みんなが心細さをこらえている時、自分だけ父の胸にすがりつくなどできなかつた。それどころか、恥ずかしさで耳の付け根まで赤くなったことを憶えている。とにかく合図で父に所在をわからせた。すぐにも連れて帰ろうとする父に、私は「先生の許可を得てから」と頑張り、ようやく現れた担任の先生の渡りに船の「どうぞ、どうぞ」で友達に気を残しながら帰途に着いた。

結局、すぐに全員自宅待機の指令となったが、この朝、警戒警報、空襲警報の手順は皆無だった。サイレンも鳴らずじまいの奇襲だった。私たちが学校から帰る頃になって友軍機の音が聞こえたくらいである。後で分かったことは、米軍の偵察機がやってきて高度を下げると、静まった家並みの間をちよろちよろ走る人影を見て機銃掃射したらしいということ。人影は男子生徒であった。米軍機からも子供だとわかったはずである。たぶんに兵士の気まぐれ行為だった可能性が強い。2人の生徒が軒ぞいに走って逃げた後を、なぞるように軒や畳に転々と弾が刺さっていた。（当時は空襲に備えて家の建戸は取り払われていた）。それが学校の近くからわが家の隣町内まで続いたのだから、父兄が心配するのも無理はない。近所では「学校がやられた」とのもっぱらの噂だったとか。

次の日、彼等は朝礼を抜けて家に逃げ帰ったとして、全校生徒の前できつく叱られた。もしかしら逃げ帰ったのではなく、遅刻してきた生徒が米軍機を認めて逃げたのかも。

福岡大空襲の時は、時折破裂音を伴って赤々と燃える博多方面の空を見ながら、福岡部へ嫁いだ姉の身を案じつつ、なすすべもなかつた。ある日、鉄工所を狙った焼夷弾の不発弾が箱崎浜にごろごろしていて、もう少し岡寄りだったら箱崎も焼失していたのだと新ためてぞっとしたものである。

そんなわけで、わが家も家族も無傷で終戦にこぎつけることができた。一晩に4、5回警報で起こされたり、分列行進の訓練と称して暑さ寒さの中で校庭に直立不動で立たされ、旗を持って行進させられたり、小学1、2年生には酷な毎日だったが、これは日本人の誰もが体験したことである。

ほんとうに悲惨な体験の多い中で私は幸運に恵まれていた。直接身に危険を感じた体験といえばこの機銃掃射と、敗戦後一人で歩いている所を進駐軍のジープに執拗ないやがらせを受けたことくらいである。いずれも優位に立つ側の戯れ事で片付けられるかもしれないが、今思い出しても恐い瞬間であった。